広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第68号　2019　111－118

修辞学と映画学を応用した文学教材分析法

―『清兵衛と瓢箪』，『ナイン』を事例に―

柳　澤　浩　哉
（2019年10月３日受理）

A Method for Analyzing Literature Materials Applying Rhetoric and Film Studies

Hiroya Yanagisawa

Abstract: It is difficult to teach literary works. A student can understand literature materials without the help of teachers, so teachers must show impressive readings in a classroom. The aim of this paper is to propose a new method of discovering convincing readings applying rhetoric and film studies. They are different fields, but by combining the useful perspective of both, a method that is easy for teachers to use can be created. Rhetoric studied the effects that various rhetorical techniques made, its accumulation of research results is effective in analysis of literature materials, especially helpful for discovering the author's ingenuity. Film studies suppose a scenario as aggregation of countless selection result, this view relativizes casts, episodes, etc. of literary works. In this paper two literary works, "Seibei to Hyotan" and "Nine", are analyzed as a case study of our method, "Seibei" is analyzed mainly using a cinematic perspective, and "Nine" is analyzed mainly using rhetoric knowledge.

Key words: teaching material analysis, film studies, rhetoric, "Seibei to Hyotan", "Nine"
キーワード：教材分析，映画学，レトリック，『清兵衛と瓢箪』，『ナイン』

１　はじめに

国語の読解の授業は難しい。教材のほとんどは，生徒・学生が自分一人で理解できる文章である。教室で精読する以上，自分では気づかない・つかめない何かを生徒に提示しなくてはならないが，毎回の授業でそれを行うのは容易なことではない。筆者が教育実習生による読解の授業を参観するたびに感じるのは，一読すれば明らかなことを黒板に整理し直す退屈な作業が授業の大半を占めていること，そして，それが改善される気配のない無力感である。そして，これは教育実習生だけなく，大半の国語教師に当てはまる問題だと想像される。教室で精読を強制する以上，生徒に自分では気づけない発見を与えることは教師の義務ではないだろうか。どうすれば，一般の教師がそれをできるようになるのか。そのための方法がもっと真剣に議論されるべきだろう。

では，生徒が自分では発見できない新しい読み（解釈）とは何だろう。そこには，いろいろな選択可能性があるが，道徳的教訓を引き出すことや，テキストから離れた想像でないことは言うまでもない。本稿ではそれを次のように規定してみたい。テキストに残された情報から，作者の狙いや計算を導き出す事。これを前提に，次節では本稿の目的を規定したい。

２　目的と使用する方法

本稿の目的は，テキストに残された情報から，作者の狙いや計算を導き出せる方法を提案することである。本稿が目指すのは一般の国語教師が使える方法であり，使いやすいこと，客観性のあること，一般性のあること（多くの教材に適応できること）を重視したい。なお，本稿では小説教材を対象とする。

作者の意図や計算を提示する方法の一つとして，テ

キスト外の情報を使う方法がある。例えば，作家の伝記的な情報，作品が書かれた当時の社会的情報・文化的情報などを使う方法である。これは確実性が高く，生徒には到達不可能なレベルの読解や作品解釈を確実に提示できる方法であるが，これらの情報が手に入る教材は限られており，さらに研究者ではない一般教師にとって現実的な方法とは言えない。何より問題なのは，テキスト外の情報を重視する姿勢がテキストの精読と相容れないことで，教室での読解が目指す形とは言いにくい。

本稿では，テキスト内の情報だけを手掛かりに作者の狙いや計算を推測するために，西洋修辞学 (rhetoric) と映画学 (film studies) の二つの蓄積を使う。この二つの特徴を簡単に説明してみたい。

3　西洋修辞学

西洋修辞学が2000年以上の歴史を持つ，説得のための言語技術の体系，およびそれを研究する学問領域の名称であることは，いまさら繰り返すまでもないと思う。本稿にとって西洋修辞学が魅力的なのは，技巧の一覧表（分類）の作成に留まらず，多くの修辞技巧について，それらの生み出す表現効果・説得効果が研究されている点である。テキストに登場する修辞技巧の効果が分かれば，個々の表現理解が的確になることはもちろん，その背景にある作者の狙いや計算まであぶり出すことが可能になる。

修辞技巧は国語科において決して軽視されてはいない。だが，それがどのような表現効果を生み出すかという点に踏み込んで，表現を分析的に見るという扱い方はされていない。本稿では，できるだけこのレベルで修辞技巧を扱っていきたい。もう一つ，従来の国語科における修辞技巧の扱いの問題点として，修辞技巧の認定範囲が狭いことを指摘したい。修辞技巧として一般に思い浮かぶ主なものは，比喩（隠喩，直喩），擬人法，倒置，反語，反復などで，国語科で取り上げる修辞技巧も基本的にこれに収まるものである。しかし，西洋修辞学が扱ってきた対象は，これより遥かに広い。例えば次のような要素を対象にしている。

論理学に近いもの
　立論形式（トポス），虚偽，文章構成，段落の関係・文の関係，議論法
心理学に近いもの
　感情を利用した説得（パトス），自分をいかにイメージさせるか（エートス）
言語学に近いもの
　文法形式，語彙，言葉の量・具体性，叙述の速さ

西洋修辞学は長い歴史の中で興味の中心を変化させながら，結果的にこれだけの広範囲の要素を射程に収めている。

例をあげると，文章構成の基本が研究されたのは古代ギリシャ・ローマの古典修辞学であるが，段落の関係・段落内の文の関係が研究されたのは，それから2000年以上後の19世紀後半から20世紀にかけてのアメリカである。序論・本論・結論という世界共通の文章構成を提唱したのは，世界最初の修辞学者と言われるシチリア島のコラクス（ギリシャに修辞学を紹介したのは彼とその弟子である）で，ギリシャ・ローマの修辞学者は本論を形成する下位要素を研究した。西洋修辞学の始祖の提唱した原理が，その後，一度も揺らぐことなく世界標準として生き続けているのは驚くべきことである。その一方，段落の機能（段落間の関係）や段落内の文の関係が注目されたのは近代アメリカで，これが現代のコンポジションやアカデミック・ライティングの原型になっている。アカデミック・ライティングが文章構成を過度に重視し，文章の内容面や説得効果に興味を持たない背景には，そのような歴史的事実が存在している。（19世紀末から20世紀前半のアメリカのレトリックは，文章の内容や説得効果を研究対象から外していた。）ちなみに，日本の作文教育で行われている，内容の配列順を考えることで内容を整理させていく方法も，そのルーツは近代アメリカの段落構成を重視したレトリックにあると考えられる。（明治から大正にかけて日本に紹介されたレトリックの多くが当時のアメリカのレトリックである。）

先ほど，修辞技巧の表現効果について述べたが，修辞学の有効性はこれだけではない。技巧の標準的な使い方と比較するだけでも，教材分析に有効な手掛かりが得られる。標準的な使い方に合致していることは話者が技巧の巧みな使い手であることを意味し，逆に標準から外れた使い方は，話者が冷静さを失っていることなどを伝えるからである。

4　映画学

映画学は多岐にわたるが，本稿が利用するのは，映画学の中ではやや特殊なシナリオ研究の領域であり，そこで論じられているシナリオ作りの方法である。ちなみに，この領域はシナリオ・ライター養成，あるいはシナリオの完成度を上げることを目的にしている。本稿ではこれをシナリオ学と呼ぶ事にしたい。

このように書くと，わざわざシナリオ学を使わず，日本でも昔から出版されている小説の書き方等を使えばいいだろう，という意見があるかもしれない。確か

に，谷崎潤一郎，川端康成，三島由紀夫といったそうそうたるメンバーが，『文章読本』という名の小説作法（小説の作り方）を出版しているし，それ以外にも有名無名の著者による小説作法は数多く出版されているが，あえてシナリオ作りに注目するのは，その中心にある次の発想が，教材分析に有効だからである。

シナリオは選択結果の積み重ねである。

シナリオ学はこの発想を徹底的に貫きながらシナリオを完成させていく。シナリオ作りは選択の連続なのである。例えば，シナリオ学の大御所であるロバート・マッキーの著書は，シナリオ・ライターの仕事が選択の積み重ねであることを至るところで繰り返している。

物事の一方の端には純然たる事実があり，もう一方の端には純粋な空想がある。この両極のあいだにひろがるのが，かぎりなく多様なフィクションの領域だ。すぐれたストーリーは，この領域のなかでうまくバランスをとっている。（注１）

（筆者注：ストーリーの構成において）重要なのは，何を含めるか，何を省くか，どんな順序で並べるかだ。（注２）

登場人物の真の性格は，大きな重圧を受け，人生を決定づける要求を満たそうとして行動を選ぶときにはじめて表出する。（注３）

シナリオを構成するあらゆる要素が，複数の選択可能性から選ばれた結果であることは言うまでもない。シナリオの制作過程では，物語の展開はもちろん，作品世界（世界観，当該社会のルール），人物のキャラクター，彼らが遭遇する事件，人物関係，彼らが互いをどう理解（誤解）するか等々，シナリオ作家はその一つ一つについて，複数の選択可能性の中から最適なものを選択し，その積み重ねとしてシナリオを完成させていく。もちろん，実際の制作過程はブラックボックスであるが，シナリオを選択結果の積み重ねとしてとらえる視点がシナリオ分析において有効である。（日本でもシナリオ作法は複数出版されているので，必要に応じて日本のものも参照したい。）

作品を選択結果の積み重ねとしてとらえる視点は小説教材の分析において新しい発想を与えてくれる。小説に書かれているのは変更不可能な動かせないこと，これが小説に対する一般的な前提であるが，この前提は小説教材に対する問いの可能性を制限してしまい，書かれたことを確認する読みしか見えなくなってしまう。しかし，シナリオ学は書かれていることを相対化し，それを選んだ作家の意図を推理する視点を与えてくれる。この発想に立てば，小説のあらゆる要素を問いの対象にすることが可能になる。例えば，主人公や周囲の人間のキャラクター。一般的な読みは，彼らのキャラクターを与えられたもの，変更不可能なものと考え，それを前提に彼らの心理や行動を分析していく。このような読みが必要であることは言うまでもないが，シナリオ学はこれに加えて，彼らのキャラクターの設定を相対化し，なぜその設定が選択されたのか，そのキャラクターを選択することで何を伝えようとした（強調しようとした）のか，あるいはキーになる人物のキャラクターの変更によって物語がどう変わっていくか，といった問題を考える。そして最終的には，映画に要求される諸条件との比較から，キャラクター設定の妥当性を判断していくのである。

この発想に立てば，人物のキャラクターだけでなく小説のあらゆる要素を問いの対象にすることができる。それは例えば，世界観（当該社会・家族などが置かれた状況・個別ルール），登場人物の能力や性格，遭遇する事件など，国語科の一般的な読みにおいて絶対的な前提とされるものまで対象になり得る。小説のあらゆる要素に対して次の問いの設定が可能である。

作者はなぜこれを選択したのか。別な選択をしていたら物語はどのように変わっていただろう。これを選択した作者の狙いは何だろう。

このように書くと次の疑問が生まれると思う。問いを立てるのは簡単だが，このような問いに的確な答えを与えるのは，非常に難しいのではないか。無数に設定可能な問いから，作品理解につながる意味のある問いを選ぶにはどうしたらよいか。テキストだけを手掛かりに作者の意図や狙いを考えることが可能なのか。といった疑問である。

以下に二つの事例を上げるが，このような問いに答えることは，実はそれほど難しいことではない。作者のこだわり，その作品で狙ったこと，作品全体の調子などに注目してそれから外れる部分，あるいはそれを強調する要素などから考えていくことで答えを導くことができる。また，どの問いを選ぶかについても，作者のこだわりや狙いと関係の深い問いを選ぶ，というのがおそらく答えになるだろう。以下では，主にシナリオ学を使った分析例として，『清兵衛と瓢箪』，主にレトリックを使った分析例として『ナイン』を取り上

げる。

5　『清兵衛と瓢箪』（志賀直哉）

5.1　この作品に対する問い

志賀直哉の代表作の一つであるが，この作品を単独で扱った研究論文は国文学でも少ないようである。この作品は，ぎりぎりまで無駄を削ったテーマ小説で，必要な情報が十分書かれている一方で，不要と思える要素は見当たらない。その結果，一度読んだら全て分かる，問題らしいものが見当たらない作品となっている。研究対象になりにくいのはそれが大きな原因だろう。だが，シナリオ学の発想を使えば，このような作品でも例えば次のように様々な問いを設定することができる。

1）才能を表現する素材にはいろいろなものが考えられるが，なぜ瓢箪を選んだのか。音楽・運動・絵画などの方が才能を表現するには一般的な素材である。瓢箪以外の素材だったら作品はどう変わったか。
2）なぜ，清兵衛を12歳に設定したのか。例えば彼が青年だったら作品はどう変わったか。
3）瓢箪の価値を証明する過程に，教員・小使い・古道具屋の三人の人物を配した意図は何か。清兵衛の学校に瓢箪を見る目を持つ教員がいた，古道具屋が偶然学校に立ち寄った，といった設定でも瓢箪の価値は証明できたはずである。
4）父親と教師は清兵衛に対して敵意に近い冷淡さを持っている。彼らは，なぜこれほど冷たく無理解なのか。
5）作品の冒頭と末尾に，語り手の生の声を置いた枠小説の構成を取ったのはなぜか。最後の絵を描くエピソードがなかったら作品はどう変わっていたか。
6）直接話法の会話が三か所あるのはなぜか。なぜ，この三つの会話が選ばれたのか。
7）教師の叱責も直接話法が形式で引用されている。これをあえて引用した意図は何か。
8）物語の前半に，禿げ頭を瓢箪と見誤ったエピソードを引用したのはなぜか。清兵衛の「瓢箪愛」を伝えるのに，このエピソードが最適と判断した理由は何か。
9）瓢箪が600円もの価値を持っていたことが，わずか一文で語られているのはなぜか。骨董屋が地方の豪家に売りつけるやり取り（交渉の会話）を引用することも可能である。その交渉場面を引用した場合，作品の印象はどう変わったか。
10）物語には清兵衛の友人が登場しない。清兵衛が孤独でなかったら，物語はどう変わっていたか。
11）瓢箪の価値が600円という法外な値段に設定されている。50円でも清兵衛の才能は十分表現できたのではないか。なぜ，法外な値段にしたのか。

このように問いはいくらでも設定することができる。これらの問いの全てにある程度の答えを用意するすることはできるが，今回は，作者の狙いや計算をあぶりだせる問い，すなわち作者のこだわりを突いていると思える問いを考えてみたい。

5.2　直接話法による会話

作者のこだわりや狙いとのかかわりで考えた場合，この作品では，直接話法によって描写された三つの会話が，重要な意味を持つ可能性が高い。6）としてあげた問いである。これが作品理解のポイントなると判断するのは，単純に長さの問題である。この作品は，ギリギリまで無駄を省いて物語の密度を上げ，全体を短くまとめようと意識している。だが，直接話法による会話は要約や部分省略が困難で広いスペースを使ってしまう。（直接話法であっても会話でなければ一部分だけを載せられるが，会話ではそれが困難になる。）つまり，直接話法による会話は，省スペースという全体方針に逆行する要素であり，作者としてはこれをできるだけ少なく・短くしたかったと考えられる。そこから，会話をあえて引用した背景には，それを必要と考える強い判断があったと推測できるのである。

ただし，小説において直接話法が重要なのは，スペース以外の理由もある。直接話法と間接話法の効果はどのように違うだろうか。間接話法は情報の再現にとどまるが，直接話法は言葉そのものの再現，つまり口調まで再現する意味を持つ。（注４）直接話法が頻繁に見られる作品では特別注意を払う必要はないが，この作品のように直接話法があまり登場しない作品では，直接話法はそれだけで強調の意味を持つことに注意したい。

直接話法の会話の最初は，父・来客・清兵衛の三人の会話で，三つの会話の中でこれが一番長い。この会話が伝えているのは，品評会で評判の「馬琴の瓢箪」を清兵衛がくだらないと感じたこと，その信念を大人に向かって臆せず言えることである。しかも，その口調はその道を極めた大人の口調である。これが伝えるのは瓢箪に対する清兵衛の底知れない自信，そして彼の子供離れした性格だろう。この会話は清兵衛の瓢箪への偏愛が，反抗や屈折の結果ではなく，彼の気質と

信念から生まれていることを伝え，さらに清兵衛の審美眼の確かさも感じさせる。だが，彼の審美眼が本物であるか否か，この段階ではその答えがまだ伏せられている。そのために，一部の読者にはこの問題が謎として残ることになる。ちなみに，謎によって観客の興味を引き物語に引き込むことは，シナリオ学において常に強調される重要なテクニックとなっている。（注５）

直接話法の第二の会話は，仕舞屋の婆さんと清兵衛の会話。特別な瓢箪を見つけた興奮を印象的に伝えるための会話と考えていいだろう。

直接話法の第三の会話は,小使いと古道具屋のもの。これは一言ずつの短い会話だが，強い癖を感じさせるリアリティの高いセリフで，二人の口調や表情までも見えるようである。この会話を境に，物語はずる賢い大人の世界に変わり「600円」のラストに向かう。

この作品には，直接話法の引用形式を取りながら対話を避けた箇所があり，担任教師の叱責（清兵衛と母親のそれぞれに対して）がそれである。教員の叱責は直接話法だが，引用されているのは教員の言葉の一部であり，会話形式になっていない。会話形式の三か所に比べてこの引用が軽くなっているのは，物語における重要さを反映していると考えることができる。このような短い作品では，直接話法，特に直接話法による会話の引用は重要である。

5.3　人物の配置と個性

次に，３）にあげた問題を考えてみたい。瓢箪の価値を証明するのに，教員・小使い・古道具屋の三人の人物を配した理由である。例えば，清兵衛の学校に瓢箪を趣味にしている教員がおり，取り上げた瓢箪を職員室で鑑定するという流れにすることも可能なはずだが，これでは面白さと説得力が半減してしまう。瓢箪の価値が簡単に明らかになっては劇的効果が半減してしまうが，それ以上に，素人の評価では説得力が生まれないからである。瓢箪を趣味にしている教員が,「これには600円の価値があるぞ。」と強調しても誰も納得しないだろう。最後の「600円」はこの作品の最大のポイントであるが，ここには相容れない次の条件がある。

瓢箪の鑑定（清兵衛の才能証明）は，偶然行われなければならない。
瓢箪の鑑定は疑いようのない形で行われなくてはならない。

この二つが相容れないのは，価値証明を疑えない形で行うためには専門家が必要だが，専門家に偶然会える確率は限りなく低いからである。この難しい条件をクリアーするために，作者は担任教師，小使い，古道具屋の三人の人物を設定したと考えられる。それぞれのキャラクターを簡単に確認してみたい。短編らしく，それぞれが明確なキャラクターを持っている。

受け持ちの教師は独善的で狭量。これは清兵衛の瓢箪愛を無慈悲かつ瞬時に打ち砕く役割を担っているからである。

小使いが狡猾なのは言うまでもないが，彼にはわずかながら瓢箪を見る目が与えられている。それがなければ，瓢箪を二か月も部屋に掛けておくことはなく，何より古道具屋に売りに行くこともなかっただろう。最初に提示された５円の買値を10倍に上げることができたのも，それがあったからだが，小使いの目についての言及は全くない。先を読めなくするための配慮と考えられる。

三人の中で最も情報がないのが古道具屋だが，彼はこの物語の中で最も重要な役割を担っている。彼には確かな審美眼とともに，瓢箪を600円という法外な値段で売りつけてしまう並外れた説得力がある。冷静に考えれば，600円という値段が彼の説得力・交渉力に支えられていることは簡単に分かるのだが，それを読者に感じさせないよう，古道具屋の能力が伏せられている。一つの選択可能性として,「地方の豪家」に瓢箪を高値で売りつける交渉場面を描くという選択肢が考えられる。これは間違いなく面白い場面になるだろうが，これを描いてしまうと作品の主役は清兵衛から古道具屋に変わってしまう。古道具屋は魅力的なキャラクターであるだけに，彼に読者の注意が向かわぬよう言及を最小限にして端役に留めておいたのだろう。

この作品の配役を考えると，主役の清兵衛を囲む父と教師に強烈なキャラクターが与えられる一方，清兵衛には極めて地味なキャラクターが与えられている。清兵衛を罰する役割の教師と父親の個性を強くすることで，彼らの仕打ちはその強さを増すことになるだろう。一方，清兵衛はどんな打ちを受けても言葉を発せず，その時の思考･感情もほとんど語られない。いや，彼の内面が描かれないのは，仕打ちを受けた場面だけではない。清兵衛は主人公でありながら，この作品は彼の内面をほとんど描いていない。さらに，小学生という設定でありながら，彼は終始孤独で子供らしい面が語られることはない。清兵衛のキャラクターは無口な職人のそれに近い。志賀は清兵衛から個性や子供らしさを奪うことによって，普遍性を与え，寓話にすることを目指したのではないか。（個性的な子供の話で終わらせたくなかった。）最初と最後に置かれた「枠」

に書かれた言葉が普遍性を志向していることは，明らかである。さらに，突出した才能を描く素材に，芸術や運動ではなく瓢箪という変則的な素材を選択した背景にも，作品全体を軽い印象にする意味があったのではないか。深い問題を軽い話に象徴させるのが寓話である。

5.4　瓢箪の執着を捨ててしまった理由

作品の最後の数行は次の文で始まる。「・・・清兵衛は今，絵を描くことに熱中している。」ここでは，瓢箪への執着が消えてしまい，次の素材（絵を描くこと）に清兵衛の興味が移ったこと，さらにその絵においても瓢箪と同じ悲劇が繰り返されることが予告されて作品が終わるが，この展開に違和感を抱く読者は少なくないと思う。教師と父親から禁止されただけで，あれほど熱中した瓢箪を忘れてしまえるのか。そして，同じ情熱を別のものに移せるのか，という違和感である。

この感覚は一見理解しがたいが，異性への恋愛とアナロジーと思えば納得できないこともない。一人の異性に燃えるような恋をしても，その異性と別れた後，別の異性を同じように愛することは少しも不思議ではない。（もちろん，個人差はあるが。）清兵衛の執着を異性愛で説明するのは強引と思えるかもしれないが，作者は意図的に瓢箪への執着を異性愛とアナロジーに描いた形跡がある。例えば，こんな表現である。「一見ごく普通な形をしたので，彼には振るいつきたいほどいいのがあった。」「その瓢箪が離せなくなった。（中略）しまいには時間中でも机の下でそれを磨いていることがあった。」「瓢箪の肌はすっかり汗をかいている。彼は厭かずそれを眺めた。」登場順とは異なる順番に並べたが，瓢箪に対して性愛を感じさせる言葉が使われている。

5.5　まとめ

本稿は『清兵衛と瓢箪』にシナリオ学の発想をあてはめた。分析の最初に示したいろいろな問いは，一見難しそうに見えるが，テキスト内の情報を手掛かりに，かなりの程度まで答えを導けることを示せたと思う。従来の教材分析にこのような発想のないことは，例えば長谷川祥子氏の整理した本教材に対する教科書の設問を見ても明らかである（注６）。

６　『ナイン』井上ひさし

6.1　技巧的な作品

過去の回想の中で，少年野球チームのキャプテンだった正太郎が，かつてのチームメイトに詐欺や盗みを働いたことが語れていく。正太郎は不思議なキャラクターの持ち主で，被害に遭った英夫（85万円分の畳を盗まれた）や常雄（400万円と奥さんを盗まれた）が，正太郎を恨むどころか感謝に近い気持ちを持っていること，何より，少年野球決勝戦での「人間日傘」が宝物のように美しい記憶であることが語られる。何層もの時間の重なりの中で，意外な事実が次々に明かされていく技巧的な作品である。比喩や擬人法など狭義の修辞技法は見られないが，かなり技巧的で表現も工夫された作品なので，この作品は修辞学の視点から分析してみたい。

6.2　言葉の量と詳しさ（現在感）の処理

まず，現在感という修辞学概念を簡単に説明しておきたい。これは叙述の量と詳しさを操作することで，特定の箇所に読者を注目させる効果である。この概念については既に何度か述べているのでポイントのみを示してみたい（注７）。現在感は次の三つの要素によって操作され，現在感が上がれば読者を注目させる効果が生まれる。

言葉の量を増やす
具体的に語る
詳しく語る

長さ・具体性・詳しさの三要素は，厳密に区別することは不可能で完全に切り離すことはできない。そして多くの場合，三つは互いに連動しながら並行的に動く要素である。だが，この三つをあえて区別する点に現在感の強みがある。以下に述べるように，この三要素が必ずしも連動するとは限らないからであり，『ナイン』にはそのような箇所がいくつも指摘できる。

この作品では，言葉の量・具体性・詳しさの三要素がアンバランスな箇所をあちこちに見いだせる。具体的には，言葉の量が多い（長く語られる）にもかかわらず，具体性と詳しさが抑えられている叙述で，三要素が連動しない変則的でアンバランスな叙述である。その典型が，新町の昔の様子の説明である。この箇所は比較的長い説明でありながら，具体性と詳しさが低く抑えられている。いろいろな店・家の様子を一つ一つ短く語っていくことで，一軒あたりは簡単でも，街並み全体では長い説明になっている。現在のチームメイトの説明についての叙述にも同様の特徴が見られ，一人一人の現在を短く列挙していくことで，全体として言葉の量は多くなるが，具体性や詳しさが低い。さらに，常夫が被害者となった詐欺事件も，衝撃的な事件があっさりと語られる。作品内ではいくつものエピソードが語られているが，その多くが現在感の低い叙

述を基本としている。なお，この作品では，詳しさ・具体性の両方が高いが言葉の量の少ない箇所を三か所指摘できる。それは，少年野球準優勝のパレード，正太郎の詐欺の口上，正太郎が「人間日傘」を作った思い出の三つである。これらの結果，現在感が突出して高い箇所はない。その多くは，長く詳しく書こうとすれば，簡単にできる内容であるが，作者はそれをしていない。（例えば，優勝パレードはそれまでの練習の思い出を加える，決勝戦の「人間日傘」では試合展開を書き込む，といった方法で長く詳しくできる。）

この作品のエピソードは，長く語られるものは具体性・詳しさがなく，具体的で詳しものは短いというように，どのエピソードも現在感が低く抑えられており，突出して現在感の高い部分がない。この背景には作者のどんな意図が考えられるだろう。背景・前景という比喩を使えば，現在感が低い叙述は背景になり，高い叙述は見る者の目を引く前景となる。この作品では，極力前景を作らず，全てのエピソードを背景にしようとする意図を指摘することができる。では，全てのエピソードを背景化した意図はどこにあるのか。

この作品の中心にいるのは，野球チームの主将を務めながら，成人してから詐欺師になってしまった正太郎である。彼は不思議な人物である。まず，彼は善悪の両面を強く持っている。だが，それ以上に不思議なのが，詐欺の被害者となった元チームメイトが彼を恨まず，むしろ感謝していることである。さらに，あちこちで詐欺を働いていながら，逮捕はもちろん警察の捜査が行われている痕跡もない。（警察が捜査していれば，田中畳店にも刑事が来ているだろうが，そのような話が出ない。また，もし逮捕されれば，それが報道されるはずである。）つまり，被害者が誰も彼を訴えていないと考えられるのである。だが，被害者に訴えられない理由も分からないし，そもそも正太郎の本性が善悪どちらにあるのかも読者には分からず，読者は最後まで宙ぶらりんの状態に置かれたまま作品が終わる。言葉を変えれば，正太郎の評価あるは彼のキャラクターを読者の側に投げ出したまま作品が終わるということである。

全てのエピソードを背景に置くことは，エピソードを平等に扱うことであり，これが読者を宙ぶらりんの状態に置くことにつながっている。仮に，決勝戦での「人間日傘」のエピソードが突出して高い現在感で語られていれば，読者は彼の善の面を大きく感じるはずである。反対に，恩人である常夫に対する盗み（奥さんと大金の両方を盗み，常夫を自殺未遂に追い込んだ）の現在感を突出して高くすれば，読者は正太郎の悪の面を大きく感じるだろう。相反するいろいろな面を持った不思議な人物，正太郎を最後までそのイメージで描き，正太郎に対する判断を読者の側に任せるために，前景になるエピソードを作らなかったと考えられるのである。

6.3　詐欺の口上

本稿が次に注目したいのは正太郎の詐欺の口上である。口上はまず，自分がある不動産会社で働き始めたことを述べ，続けて「これまでいろいろと心配をかけてきたが，今後こそ性根を据えてやる決心だから，どうかご安心いただきたい。」と述べている。当時の正太郎にはあちこちで寸借詐欺をしているという噂が流れており，このイメージを払拭するための言葉である。アリストテレスは『弁論術』の中で，序論で自分に対する偏見を取り除かねばならない」ことを述べており，これはその定石に合致する（注８）。さらに，自らを謙虚に反省する言葉でもあり，エートスの中の「好意」に該当する説得ともなっている。次に，「出入りの畳屋がぐずな畳ばかりおさめてくるので担当者が弱り切っている。それを見て，会社に自分を売り込みたいという気もあって，つい，『畳ならぼくにおまかせください。』と請け合ってしまった。」と語る。ここには複数の説得戦略が見いだせる。一つは，畳の質を褒めて相手に快感を与える説得（これもエトスの「好意」に該当する），そして，自分に協力することが自分と担当者の両方を助けになるという義憤に訴える説得（パトス）。さらに，『畳ならぼくにおまかせください。』という言葉が，この畳店に対する自分の信頼をアピールしている（これもエートスの「好意」）。さらに，この言葉は自分自身を直接語る言葉であり，自分を隠さず伝える効果も感じさせる（エートスの「徳」）。ここまでは相手に快感を与える説得を続けているが，最後の口上は一変して詐欺師らしいものになる。「無理を申してすまないが，明朝まで建売五軒分の畳を都合してはくれまいか。」という言葉である。これは相手に考える時間を与えないことが狙いだろう。

この口上が，相手に快感を与える方法をいくつも重ねていることは上に述べた通りだが，この戦略は詐欺の口上として特殊な部類に入るのではないか。詐欺では，不安に訴える，金儲けをもちかけるといった，人間の弱さに付け込む説得を好むからである。例えば，このままでは不幸が起こる，あなたは損をしている・騙されている，この取引は大きな儲けにつながる，といったストラテジーである。詐欺がマイナスの感情を好んで利用するのは，弱さに付け込む方が相手を動かしやすいからだが，正太郎は心地よくさせる感情だけを使うことで詐欺を成功させている。さらに，相手の

信用を得るための，何らかの保証を提示するという言葉がなく，この点も詐欺の口上としては特殊と言えるのではないか。

6.4　正太郎はどんな人間か

正太郎がどんな人間なのかを判断するのは難しい。（この問いは教科書の設問にも取られているが，かなり難しい問いだと思う。）既に述べたように彼は善悪両面を強く持っている人間で，それが彼の中でどのように共存しているのか，それを説明するエピソードや地の文が見当たらないからである。

本稿は，詐欺の口上が正太郎の人間性を考える手掛かりになると考える。口上では，心地よくさせる感情だけを巧みに使い，人間の弱みに付け込むような戦略を使っていなかった。また，詐自分を信用させる，儲けを保証するといった言葉が見当たらない。つまり，詐欺の口上としては特殊なもので，彼が慎重に戦略を練り上げた上でこの口上を作ったとは考えにくく，思いつくままを言葉にした可能性が高い。口上には，彼の思考パターンや人間性が色濃く反映されているはずである。

では，ここからどのような人間性が読み取れるのか。彼は相手を心地よくさせる天性の才能を持っており，その才能によって，人から好かれ，人を動かしてしまう。少年野球の「人間日傘」も，これ以上にチームメイトの気持ちをつかむ行動はないと思えるものである。彼には，相手の気持ちを掴む言葉や行動が常に見えるのではないか。彼が詐欺の常習犯でありながら，被害者が誰も彼を訴えず，警察に追われている気配がないことも，被害者みんなに愛されてしまうと考えれば納得できる。常雄の奥さんも，その才能の被害者なのだろう。正太郎は，人の気持ちをつかんでしまう才能と，罪悪感・倫理観の歪みが同居してしまった人間で，次々に罪を重ねながらも，憎まれないのではないか。

『ナイン』の分析では，シナリオ学の蓄積を使わなかったが，『清兵衛と瓢箪』の場合と同様，作品のいろいろな設定について問いを立てることはもちろん可能であるが，『ナイン』は特に修辞学の観点から見て興味深い作品なので，問い立てるプロセスを省略して修辞学からの分析のみを提示した。

7　終わりに

本稿は小説教材を分析する方法として，レトリックとシナリオ学を応用する方法を提案した。これは，方法の体系化と事例とを両輪として提示すべきであろう。また，方法的には調整し体系化すべき部分が多いが，最初に示した生徒には到達できない読みを提供する方法としての有効性の一端を示せたと思う。

【注】

1）ロバート・マッキー（2018）p.39
2）ロバート・マッキー（2018）p.45
3）ロバート・マッキー（2017）p.71
4）柳澤浩哉（2005）
5）例えば，柏田（1999）pp.73-97
6）長谷川祥子（2016）
7）柳澤浩哉（2009）など
8）アリストテレス『弁論術』1415a

【引用文献】

ロバート･マッキー（2018）越前敏弥訳，『ストーリー　ロバート･マッキーが教える物語の基本と原則』フィルムアート社
ロバート･マッキー（2017），越前敏弥訳，『ダイアローグ　小説・演劇・映画・テレビドラマで効果的な会話を生み出す方法』フィルムアート社
柳澤浩哉（2005）「引用表現」（多門靖容，半沢幹一他『ケーススタディ　日本語の表現』（おうふう）pp.90-95
柏田道夫（1999）『エンタテイメントの書き方１　ドラマ別冊』（映人社）
長谷川祥子（2016）「文学的文章を「読む」学習指導－『清兵衛と瓢箪』を例にして－」（『札幌国語研究』）**21**，pp.77-84
柳澤浩哉（2009）「語彙・文法と表現」（糸井通浩・半沢幹一他『日本語表現を学ぶ人のために』世界思想社）pp.132-148
アリストテレス，戸塚七郎訳『弁論術』岩波文庫，（1992）